

メキシコ社会の中の日本

三井 広一

日系社会の財産

メキシコを代表する画家となられたルイス・ニシザワ画伯は、1918年メキシコに生まれた。画伯の父親は、1904年の日露戦争に参戦した後、アメリカ合衆国への移住を目指したが、1907年の日米紳士協定により米国移民が制限されたため、メキシコのマンサニージョに上陸した。画伯はその父親とメキシコ人の母親の間に生まれた、日系二世である¹。2014年9月30日、多大な功績を残して97歳の人生を閉じられた。

ニシザワ画伯は、生前、いつもお優しく、常に周囲の方々に心配りをされる姿が印象的であった。ニシザワ画伯より3ヶ月前に亡くなった、ニシザワ美術館のマルガリータ・ガルシア・ルナ前館長は、画伯を通じて、日本文化とは何か、日本人とは何か、ということを見ていた。特に、精神性の高さに共感されていたらしい。



ルイス・ニシザワ画伯・マルガリータ館長

ニシザワ画伯の最後の壁画となった長さ20メートルを越す絵について、マルガリータ館長は資料を残されている。その壁画は、多くのメキシコ人画家が描いているメキシコ革命をテーマにした絵であるが、他の壁画と違い、スペイン人が殺戮している様子や革命の戦いの様子などを描くのではなく、「革命や変革は武力ではなく、知恵と言葉（文字）で行うものである」というメッセージを込めて描かれたそうである。絵は中央に大きな掌が描かれ、その真ん中に女性のキリッと締まった唇が描かれている。これが知恵と言葉の象徴であり、周りにメキシコが生んだ代表的な知識人やメキシコの象徴となる物が描かれている²。

ところで、日系社会において、現在、ご存命の先人



ニシザワ画伯制作の州庁舎の壁画



カルロス春日氏受勲（提供：Kenji Onodera氏）

の方々の中で、日墨協会を盛り立ててこられた一番の功労者は、何と言っても、カルロス春日氏であろう。先人の方々に誘われ日墨協会にかかわることになり、中に入ってみてその価値を見だし、お父様に教えられた「真の愛とは、自分が愛する団体のために自ら進んで尽くすこと」という精神を実行された³。他の協会のリーダーの方々もそうであったように、身命を賭して協会のために尽くされた。

また、春日氏は、「父親が言っていたのは、人間が幸福であるのには日の丸でなければならない。それは、自分が真ん中にいて、経済的にも、社会的にも、文化的にも、健康的にも、また、家族的にも輪を作らなきゃならない。お金がたくさんあっても、社会的には誰

も振り向いてくれないとか、インテリでも、偉い人だと思われても、家賃も払えないような男ではだめだ。バランスのとれた輪を作るといことですね。」とおっしゃっていた。その輪には、人格面も含まれるのだろう。

日本に対するメキシコ人の反応

1874年メキシコの金星観測団が日本を訪れ、日本文化や日本人の良き印象をメキシコで報告したことから、列強との不平等条約の解消や日本人移民の受け入れにつながったという事実は、周知のことである。このような歴史があったおかげで、概ね、メキシコ社会における日本人の印象は良い。メキシコ人からよく聞くのが、「日本人は信用がおける」とか、「礼儀正しい」という褒め言葉である。こういう日本人に対する印象こそ、メキシコに根を下ろした日本人が培ったものではないだろうか。

もちろん、「日本人は好きではない」という意見も聞いたことがある。大変残念なことだが、そういうことを聞くたびに、襟を正す思いにさせられる。

2011年、外務省はメキシコ人における対日世論調査を行った。その結果がウェブサイトに掲載されている⁴。「日本のどの面について関心があるか」という質問に対しては、「科学技術」が52.4%、次に「文化・芸術」が48.5%で続き、「歴史」が28.1%、「経済・ビジネス」が27.4%、「日本食」が26.4%が続いている。意外に、文化・芸術面に対する関心が高い。

一方、メキシコのメディアにおける日本への関心はどうであろうか？ 有力月刊誌のProceso紙は、昨年末、慰安婦問題に関する日韓合意について報道したが、その時、使った言葉は“esclavas sexuales”、つまり「性奴隷」である⁵。

また、昨年10月、南京虐殺がユネスコの世界記憶遺産に登録されたことは、メキシコでもグーグルが、韓国放送公社のKBSワールドラジオのwebサイトの記事を紹介している⁶。さらに、中国が昨年行った抗日戦争勝利70周年の行事に関する記事も見かける。それに対する読者の反応は、ほとんどが日本を擁護するコメントであるが、中には、中国に同調し、「日本の軍国主義に対する勝利、おめでとう」⁷というように、全く中国寄りの読者コメントが紹介されている。中国や韓国の情報に影響を受けている様子も窺える。

しかし、前述の外務省のアンケートでは、最も親近感がある国としては、米国が62.4%、スペイン41%、カナダ39.6%に続き、日本は25.9%で4番目である。

これこそ、日系移民120年の歴史の中で先人の方々が、日本の文化を根底にし、メキシコ社会において信頼を得て、日本人を、日本文化を高めて下さったからではないだろうか。

日本の何がメキシコに受け入れられているのか？

昨年12月に不慮の事故で亡くなられた、ポップカルチャー研究家である櫻井孝昌氏が、2015年9月、日墨協会において講演をして下さった。その時に、「日本の江戸時代に栄えた浮世絵の世界にアイドル文化の原型を見ることができる、まさに浮世絵はアイドル文化である」というようなことをおっしゃっていた。

江戸時代は、約260年間、戦争らしい戦争もなく、平和状態を日本にもたらした。この「天下泰平」の江戸時代の大衆文化を描いたのが浮世絵である。浮世絵というと美人画を思い浮かべるが、そこには吉原の遊女ばかりではなく、参詣客で賑わう社寺の茶屋の評判となった美人給仕女なども描かれている⁸。まさに、身近なアイドルに触れることができるメディアだった。

このような浮世絵の大衆への普及について、司馬遼太郎氏は「美術の大衆化が近世の特徴」⁹と述べている。

近年、世界にカワイイ文化が受け入れられているが、当初、日本的なアイドルは、欧米にはあまり受け入れられなかった。しかし、メキシコには、日本のアイドルの曲を日本語でカバーして踊り、日本のアイドル文化をそのまま受け入れているグループがいる¹⁰。櫻井氏も、「このような現象はメキシコだけである」とおっしゃっている。メキシコには、そのような日本のアイドル文化というか、大衆文化隆盛の時代から受け継ぐ文化を受入れる土壌があるのだろう。

もともと大衆文化であった俳句も、詩人であり、新聞記者であったホセ・フアン・タブラダ氏が、1900年、外交官として日本に赴任した際、俳句の世界に魅せら



櫻井氏講演—講演後講師ならびに山田駐メキシコ大使を囲んで
2015年9月日墨協会

れ、自らも俳句の本を出し、メキシコに紹介した。その影響を受け、自ら俳句を作り、数冊の本を出版している詩人のアルトゥーロ・ゴンサレス・コシオ氏は、「俳句の世界では自分が自然の中に入らなければならない。内側から自然を見なければならない」と、西洋の自然に対する捉え方が額縁に風景を収めて外から見る感覚で捉えるのに対し、日本人は自然に対立するのではなく、自然に溶け込み、自然と一体化しようとする希求が強い¹¹ 日本文化の特徴を、西洋人であっても掴んでおられる。

日本人の美意識が行動規範

織田信長は、家来を統率するのに茶の湯を用いた。そのおかげで、茶道文化は大きく発展するとともに、「利休七哲」の中に、傑出した茶人として信長の家臣も名を連ねている。当然、武士の美意識の確立に寄与したと言っても過言ではない。

日本人の美意識については、「日本の芸術には根本において優しい情的な性格が濃厚にひそむのです。明確な知性や、強靱な意志などよりも、いきいきした優美で中和的な感情に優れているのは、当然と言えます。複雑なものにまとめあげ、そこに機知的でリズムミカルで装飾的な調和をつくり出すこと、ここに日本人の生活と思想が成立し、またその特徴ある美術が育てられてきました」と美術評論家の河北倫明氏は述べている¹²。

また、江戸時代に武士道を説いた「葉隠」の書には、「茶の本意は、六根を清くする為なり。眼に掛物生花を見、花に香をかぎ、耳に湯音を聞き、口に茶を味はい、手足格を正し、五根清浄なる時、意自から清浄なり。ひっきり意を清くする所なり。我は二六時中茶の湯の心離れず、全く慰み事にあらず。」¹³とあり、茶道の心が生き方の美学として、武士道に溶け込んでいる。

メキシコで長年、講道館柔道を指導されている伊藤襄治氏は、講道館柔道の創始者嘉納治五郎氏の教えを踏まえ、「柔道は人づくりである。体づくり、心の成長の重要性を教えている」ことをモットーとされており、最初は柔道の技を習いに来たメキシコ人も、その深さを知り、精神面の向上を目指すという。

先日、NHK で、司馬遼太郎没後 20 年を記念した番組を放映した。そこで、司馬遼太郎は、鎌倉時代に生まれた武士道が、戦国時代、江戸時代を経て、明治には庶民まで浸透して行ったと結論付けている。そして、武士とは、「人を殺す術を身につけた人ではなく、いか

にして国家のため、人のために尽くそうという精神を宿した人たちである」と定義し、「どう行動すれば美しいか?」、「どう行動すれば公益のためになるか」という行動規範を述べている¹⁴。明治期にはこういう生き方、考え方が日本文化の根底となったと考えられる。

和の心、和の文化こそ日系社会が受け継いできた財産

1897 年に始まるメキシコへの日系移民。江戸時代を経て明治に庶民に広がった日本文化を携えての移民であつたに違いない。そして、日系社会を引っ張って来られた方々は、日系社会の軸である日墨協会のために、本業を後回しにしても協会に尽くしてこられた。このような姿勢、春日氏の公益のための精神、輪の精神、ニシザワ画伯の「平和的革命」の心、そして、メキシコに受け入れられた、大衆まで浸透した美意識など、これらが全て、和の心、和の文化として位置付けられるのであろう。

「和を以て貴しと為す」に始まる、聖徳太子が定めた 17 条憲法。世界初の憲法としてメキシコでも研究されている。この「和の心」こそ、時代時代に受け継がれ、江戸時代泰平の世を経て醸成された日本文化の本質であり、日系社会にも受け継がれていると言える。むしろ、日本人はこのような思想があつたからこそ、異国の地で生き、家庭を、そして、日本人のコミュニティを築き、メキシコ社会から信頼を得て来たのではなかろうか。

2014 年、安倍首相が、ラテンアメリカを訪問された際ブラジルにて、「日系社会がブラジルで獲得している『信頼』と『信用』は日本にとって大きな財産」¹⁵とおっしゃったが、このことはメキシコにも当てはまる。ここメキシコにおいて、和の心、和の文化を継承し、さらに発展していくことこそ、これからの日本の、否、世界の財産となるのではなかろうか?

昨 2015 年 3 月、日墨協会は和久井伸孝会長のもと新執行部が発足し、協会の改革と、先人が残した有形無形の財産を継承し、生かしていくという目標を掲げ、出発した。そして、今、新たな日系社会の財産を築く時期に来ている。

日墨協会は 60 周年を記念し、日本の武道や医療を通じて健全な肉体と心を養う「武道・医療センター」の建設計画、レストランでは、茶室を生かした日本の食文化を伝えられるメニューの創作や、新進の芸術家を支援するための文化会館における特別展覧会、大規

模な「日本祭り」の開催などを予定している。このような営みを中心に、社会のために役立つことを重んじ、美しく行動する精神を培って来た「和の文化」を、さらに継承していくことが、今、メキシコの日系社会に課せられた使命ではないかと受け止めている。

(みつい こういち 日墨協会理事・広報出版部副部長)

- 1 Sergio Hernández Galindo, Los que vinieron de Nagano, 2015
- 2 Úrsula Coter García Luna, La Revolución mexicana en el sentimiento de Luis Nishizawa, 2015
- 3 日墨協会「50° Aniversario Asociación México Japonesa」p46
- 4 http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/release/23/6/0609_03.html
- 5 <http://www.proceso.com.mx/424785/japon-y-corea-del-sur-llegan-a-acuerdo-sobre-esclavas-sexuales-de-la-segunda-guerra-mundial>

- 6 http://world.kbs.co.kr/spanish/news/news_Cu_detail.htm?lang=s&id=Cu&No=47729¤t_page=3
- 7 <http://www.granma.cu/mundo/2015-09-03/celebra-china-aniversario-70-de-la-victoria-en-la-guerra-anti-fascista-mundial>
- 8 小林忠/大久保純「浮世絵の鑑賞基礎知識」至文堂 2000年 p35
- 9 司馬遼太郎/ドナルド・キーン「世界のなかの日本」中公文庫 p114
- 10 <http://matome.naver.jp/odai/2137689711649848401>
- 11 栗田勇「利休と日本人」祥伝社 2002年 p54)
- 12 河北倫明「日本美術入門」社会思想社現代教養文庫 1978年
- 13 嘉村孝「葉隠論考」創英社 2001年 p106~107
- 14 NHKスペシャル「司馬遼太郎思索紀行この国のかたち第2集 “武士” 700年の遺産」
- 15 www.br.emb-japan.go.jp/nihongo/pdf/211114-embajador.pdf

ラテンアメリカ参考図書案内



『コカインゼロゼロゼロー世界を支配する凶悪な欲望』

ロベルト・サヴィーノ 関口英子・中島知子訳 河出書房新社
2015年1月 521頁 2,600円+税 ISBN978-4-309-20667-7

『メキシコ麻薬戦争 ーアメリカ大陸を引き裂く「犯罪者」たちの叛乱』

ヨアン・グリロ 山本昭代訳 現代企画室
2014年3月 417頁 2,200円+税 ISBN978-4-7738-1404-0



カルデロン PAN 政権下の6年間で激化した麻薬戦争は、12万人余といわれる犠牲者を出したといわれるが、PRIのペーニャ・ニエト政権に変わっても麻薬マフィアが絡んだ暴力は未だ収束する気配はない。

イタリアで小麦粉の最高精製度を意味する000から上質のコカインを意味する『コカイン ゼロゼロゼロ』を表題にした本書は、コカインをめぐる組織ー麻薬カルテルーの仕組みと変遷、規模、影響力、構成員が参入してから殺し屋や売人等その道の“プロ”になっていく過程と手口、輸送を請け負う犯罪組織、マネーロンダリング、メキシコやコロンビアのみならず世界制覇を目論むロシア・マフィア、アフリカの経由地化、密輸のルートと手口の巧妙化などを、メキシコを中心に「物事をありのままに語って」いて、優れた“商品”であるコカインをめぐる地球規模の動き、現代社会がコカインの生み出す資本によって浸食されていることをあぶり出している。著者はナポリ出身のイタリア人ジャーナリスト。

『メキシコ麻薬戦争』は、英国生まれのジャーナリストが、国家のコントロールに挑戦する犯罪集団との凄惨な闘いの実態を残虐な殺人現場の描写も厭わず、克明にルポルタージュしたもの。世界各地で是とするか否とするか議論が分かれているが、麻薬戦争を終結する切り札としてすでにムヒカ政権のウルグアイで採用されたマリワナの合法化についても言及している。

(桜井 敏浩)